

# 理事長所信

理事長 市川 裕光

## ～創始の想い～

「夢の超特急」東京－新大阪間を結ぶ東海道新幹線が開業。  
アジア地域初となる、第18回夏季オリンピック東京大会が開催。  
県内においては、栗島付近の海底を震源とする新潟大地震が発生。  
国外では第35代アメリカ合衆国大統領ジョン・F・ケネディの暗殺事件。・・・

戦後の焼野原からの復興と、高度経済成長の象徴として、国をあげての夢と希望にあふれた大きな国家プロジェクトの実施とともに、地震大国という宿命からは逃れられない大規模な自然災害の発生、または世界に衝撃を与える事件が起こったこんな時代背景の中、  
1963年 高田青年会議所が発足。  
翌1964年 直江津青年会議所が発足。  
そして1965年、高田・直江津両青年会議所が合併し、本年創立50周年を迎えます。

40周年記念事業において、高田青年会議所初代理事長、故本間一夫先輩にお話をお聞きしたところ、「当時の建設予定では、ここ上越地域には新幹線が開通しない可能性があった。何とか新幹線をこのまちに開通させ、子どもたち・孫たちの時代に、他地域と勝負の出来るまちを残したい。そのためには、高田・直江津両市がひとつに合併し10万人都市を実現させ、市民の総意で新幹線と呼び込みたい。だから我々青年会議所（高田・直江津）がまず一緒になって、未来のまちを創造するために、積極的に両市の合併運動を広げていく。この事を第一義に青年会議所運動を行っていた」と仰っておりました。創始の想いは、実におよそ50年という長い期間を経てようやく、2015年北陸新幹線開業という形で実現を迎えようとしています。過去50年の青年会議所運動に触れる中で、明るい豊かな社会の実現のために、絶え間なく受け継がれてきた想い・信頼・信用の上に成り立つ青年会議所運動の歴史を改めて感じております。その節目となる本年50周年を迎えるにあたり、まちや社会の発展の先導役は常に我々青年会議所であるという気概を、故郷上越を思い行動するもの同士が共有し次の50年へと繋いでいく、そんな使命感で満ち溢れています。我々は青年会議所運動の歩みを止めてはなりません。運動の形は変わっても、今この時代に則した方法で、若者らしく積極果敢にまちづくりのオピニオンリーダーであり続けましょう。

## ～周年の意義～

理事長を拝命し、過去の基本資料を可能な限り読み返すことで、改めて気づくことが出

来ました。それぞれの時代において時の潮流をつかみ、未来の理想のまちを考えた時、ひとつの小さな想い（志）であったものが、他者を刺激し想いを共有化させ、コミュニティを形成する（集）。想いの連鎖が拡大し繋がることで、大きな輪（力）となり、理想としていた形が実現へと導く。このことは例会や理事会等で唱和している「志を同じうする者、相集い、力を合わせ・・・」そう、綱領そのものです。ここ近年の青年会議所運動は、社会の仕組みと同様に、情報量が増加し事業実施までのプロセスや制度も複雑化しつつあることは事実です。それ故に目の前のやらなければならない事業の構築に力を注がざるを得ないために、本来考えていた想いとそれを実現させる強い信念が薄れているように感じます。従って周年の意義とは、創始の想いを改めて心に刻み、青年会議所運動とは何のために行っているのか、個々の想いは他者に届いているか、想いと力が合わさり信念を持って、未来の明るい豊かな社会の実現という方向に皆が向いているか、共に協力し創造しているかを、ふと立ち止まり今一度再考することではないでしょうか。

～今取り組むべき課題として～

経済・社会両面の復興が声高に叫ばれていた一昨年の政権交代後、「大胆な金融政策（金融緩和）」・「機動的な財政政策（財政出動）」・「民間投資を喚起する成長戦略」を基本方針とした『アベノミクス』と呼ばれる経済政策は、【期待感】を生み出したという点では、一定の成果を上げていると思いますが、実際に経済が長期にわたる停滞から脱却できているかどうかはまだ明確ではありません。我々が住むこの上越市の経済・社会情勢も同様に、まだまだ先行きの見通しが悪く、明るい豊かな社会とは言い難い現実であります。しかしながら、その要素は十分に兼ね備えた、魅力あふれる地域であることには間違いありません。青年会議所運動とは、想いを語り発信することで、我々も含め地域住民の意識に変化を与え社会を変えていくことであり、我々はその自覚を持っています。そして構成メンバーは地域経済人であります。我々はこれまでもこれからも、常に時代によって変化する地域の課題に取り組み、調査・検証し、より良いまちづくりを提唱し、地域の発展に寄与し続ける必要があります、ひいては国の復興と成長に貢献していくと信じております。

2015年の北陸新幹線開業により、首都圏へのアクセスという利便性の向上が、より一層のビジネスチャンスの広がりへと期待されます。一方でこの地域からの人口・人財の流出や、単なる通過駅となりかねないネガティブな要素があることも事実です。さまざまな議論や、解決しなければならない課題は多くありますが、いよいよ我がまちにも新幹線がやってくるという期待感を、地域住民と共に共有することから取り組んでみたらどうでしょうか。そして地域をあげて乗降者を歓迎し、上越市の魅力を発信することで、交流人口の増加につなげていく、そんな機運を新幹線開業という切り口で地域住民と共に高めてまいります。

国内外において財政破綻により自治体機能が消滅するような厳しい時代の中、400年もの長きに亘り多くの先人達・先輩諸兄が情熱を注ぎ、今日まで魅力あふれる地域として

発展を遂げてきた我が故郷。本年は高田開府400年を迎えます。この100年に一度のイベントを起爆剤とし、より地域の活性を推進しようと、行政や市民活動団体が市内各所で記念事業を展開しています。私たち青年会議所もこの地域で活動していく以上、我がまちの成り立ちからの歴史を市民と共に再認識し、400年間のさまざまな文化に触れることが必要ではないでしょうか。歴史・文化に触れることで、我々市民はこの故郷上越に対して今一度まちへの誇りを持ち、このまちに住む市民としてのアイデンティティ（自分らしさ）に気付き、さらに100年後も魅力あふれる上越市であり続けられるよう共に創造し、地域のさらなる発展に寄与する運動を行ってまいります。

過去50年間、青年会議所が地域に根を張り運動してきた実績は、行政や市民活動団体に広く認知され、私達に対する期待感に関係各位と話をするなかでよく感じることができます。新幹線開業または高田開府400年事業においても、そういった負託と信頼に応えることにより、青年会議所としてより一層の存在意義を確立したいと考えます。

2011年3月11日に発災した東日本大震災。私は社内で体験しました。数分に及ぶ緩やかな横揺れにより、ただ事ではないことがすぐわかりました。程なくして映し出されたテレビの映像からは、大津波がまちを飲み込み壊滅させていく、まるで映画のワンシーンを見る様な衝撃的な様子が映し出されていたことを今でもはっきり覚えています。そしてこの地震と大津波による原子力発電所の事故により、日本の原発の安全神話は崩壊しました。新潟県内においてもこの10年間で大規模な地震が3回、また豪雨による水害、地滑り等が多発しています。天災に限らず、自動車社会に象徴されるような人的・物的な悲惨な事故の増加、または凶悪な犯罪事件が毎日のように報道されています。我々市民が豊かで快適な生活を送るためには、生活の基盤であるコミュニティがしっかりと成り立ち、その上で地域コミュニティ間の連携をもっと活性させることが必要ではないでしょうか。そうすることにより、いざという時の有事に備えられる、安心・安全な暮らしの確立を目指してまいります。

また東日本大震災を契機に、エネルギー問題がよりクローズアップされています。もともと我が日本は資源に乏しく、諸外国からの輸入に頼らざるを得ない体質でしたが、近年の調査により未知の可能性として、日本海にも資源が豊富に存在していることが事実として報道され、政府も将来の商業化に向けて動き出しております。新たなエネルギーと言うキーワードを活用し、ここ上越市から全国へ、または世界に向けてエネルギー供給の発信基地としてのまちづくりとなり得る可能性に取り組んでまいります。

これまでも青年会議所運動を通して、あらゆる角度から未来のまちの提言を行ってまいりました。豊かな自然からは恩恵を被る反面、時として一瞬で暮らしを奪い去る恐ろしさがあることも意識する必要があります。地域経済や産業が潤い、快適で安心な暮らしが過ごせる未来地図を描くことで、我々も含めて次の世代がこの地域に将来も住んでいたいと思えるような運動を展開してまいります。

私は2003年に青年会議所に入会しました。入会した動機は仲間づくりと、自分の考

え・想いをひと前でしっかり説明でき理解してもらえるスキルを高めたいという、ありきたりといえばそれまでの理由でした。入会当時の情報処理や出欠のとりまとめ等の環境は、現在と比べればいわゆるアナログの要素が大きく、それ故に相手と直接触れ合う機会をさまざまな場面で多く経験することができ、青年会議所に求めている目的・目標をある程度達成できたかと思います。一方今日のメールに象徴されるように、デジタル的な連絡手段は端的にかつ瞬時に情報伝達ができる点では効果がありますが、やはり顔と顔を合わせて自己表現をすることが本来のあるべき姿勢だと感じます。会員一人ひとりまたはこれから入会してくるメンバーにとって、青年会議所に求める目的・目標は十人十色だと思いますが、社会で生活していく大前提は、人と人とのつながりを大切にすることです。そのためにも、人間臭く自らの意思をしっかり相手に伝えられる表現力、相手を思いやる寛容な心、持ちつ持たれつを精神を養う必要があります。そういった基本的姿勢が備わってこそ、青年会議所の運動を通じて、地域というフィールドに対してより効果を与える事が出来ると確信しております。限りある時間と労力を費やす以上、ここで得た経験と情報をまずは自分たちが十分活かし、そして我々の小さなコミュニティである家族の幸せのため、また会社の発展のためにフィードバックさせてこそ、青年会議所運動を行っている意義があり、地域の発展につながると信じています。

#### ～ J Cとしての未来の開拓～

かつては『 J Cがある時代』から、『 J Cもある時代』だと、最近青年会議所の存在価値はこんな風に表現されています。専門特化した多様な市民活動団体が確立し、かつ市民レベルでも地域発展に寄与しています。そしてそれぞれの活動によってさまざまな経験・実績を積み、情報量は有機的な財産となっていると感じております。これからはより一層それぞれの団体が手と手を取り合い、一人ひとり（個）の力を結集し、相互連携をより強化し、皆の力をあわせることにより「総合力」で地域の発展に貢献していくことが重要ではないでしょうか。この地に住まうもの同士が共に協力し創造することで、小さな運動が大きな輪となり、さらに上越市が魅力的な地域となっていくものと信じております。

ただ、やはり我々は「青年」会議所なのです。設立当初の青年会議所は、国家プロジェクトをも動かし、まちの発展のため尽力してきました。その運動は、県内はもとより、全国にも影響を及ぼす活力ある運動でした。私はそんな創世記の運動のように、青年らしく失敗も恐れず、積極果敢に大胆な発想力を持って、地域にインパクトを与える運動を示してきた『 J Cしかできない』気概を、今一度現役またはこれから入会するメンバーに感じてほしい。時代の変化とともにより公益性を求められる組織体へと進化したとはいえ、まちを変えたい、発展させたいという想いは青年会議所運動を行っていくうえでは何ら変わりません。失敗を許される団体という言葉は、これからも歩み続ける我々にとってのまさに後押しをしてくれる後ろ盾であり、たとえ失敗をしてもそれを次に活かすことで必ずや有意義な結果を導くことができるはずです。遠慮する必要はありません、思う存分我々の主張をしていこう。それが40歳までの我々に与えられている青年としての特権だから。

二度と戻れないこの瞬間に、志を同じうする仲間とともに何でも触れてみて、迷い悩んで壁にぶつかっても、青年として輝く運動をしていきましょう。そして今この時、創始の想いを心にしっかり刻み、地域を変えていくのは、変えられるのは我々青年会議所しかないのだという誇りを持ち、次の50年に向けて未来のより良い上越市のあるべき姿の実現に向けて、新たなる一歩を踏み出していきましょう。